

巻頭エッセイ

港湾建設技術の国際化に期待する



佐原光一

国土交通省 港湾局 環境・技術課 課長

この8月中旬、久しぶりにブラジルを訪問した。15年程前に、大使館員として3年間赴任していたときの記憶に残っているブラジルとは大きく変わったと感ずることが目立った。まさに十年一昔といった感を強くした。

私の駐在していた15年前のブラジルは、失われた20年（'80年代～'90年代）の真っ只中で、商店の棚からは商品が消え、毎年1,000%を越すハイパーインフレが経済を疲弊させていた。また、国内産業保護のため製品輸入も極端に制限されていたため、外国品を目にする機会がほとんどなかった。それなのに、今回目にしたブラジルの町々には、どんな田舎でも外国ブランド（国産品も輸入品も）の商品を多く目にする事ができた。今回感じたもっとも大きな変化がこの外国ブランドの進出であった。

多民族国家ブラジルではあるが、それでも欧州出身が多数派を占めること（日系は百万人以上で日本からは巨大移民に見えるが総人口の1%未満と少数派）、さらに国土が米州大陸の一国であることから、外国ブランドの中では欧米のブランドが多数を占めるのは当然であるが、日本のブランドもなかなかがんばっている。トヨタ、ホンダ、ソニー、パナソニック、YKKといった工業製品は世界共通ブランドだが、ブラジルでは、ヤクルト、日清といった食料品ブランドも幅を利かせている。さらに驚くことには、鮎は代表的なブラジル料理のシュラスコに欠かせない一品になっている。

さらに驚いたことは、これら日本食の人気と同時に日本独特と思っていた食材までが広く海外に進出していることであった。親方日の丸産業の代表で、常に関税障壁に守られてばかりいると言われる農業であるが、生産技術、種苗技術では海外で活躍している様子が驚かされた。

今回の滞在中、旧知のブラジル人友人（元国際コーヒー連盟事務局長で国際派）の自宅での夕食会に

出されたイタリア料理には、マッシュルームではなく椎茸とシメジが使われていた。ブラジルでの名前を尋ねたら、いとも簡単に“Shiitake e Shimeji（椎茸とシメジ）”という答えが返ってきた。この他にも、彼らの口からは「ナメコ、柿、ポンカン」といった日本食材の名前が日本語で出てきた。実際、外国を回っていると、これらの食材はとても人気があることに気付くし、味の素、カップヌードルなどのように世界を席巻している食品も多い。

このような国産技術の国際化という視点で我が港湾建設技術を見てみたとしたら、どのような評価がされるのであろうか。かつては、プロジェクトXで放送されたスエズ運河の工事のように、日本の港湾技術者が広く海外で活躍していた。近年も、シンガポール港の拡張工事には、日本企業が活躍していると聞く。しかし、そのような現場でも、これが日本オリジナルな技術であると訴えることのできる技術は少なかったのではないだろうか。

4年程前にパナマ運河庁から日本に研修に来た技術部長は、帰国するなり、「環境への配慮の行き届いた最高の施工技術を見た。」と熱く語ってくれた。国際協力の現場では、毎年多くの研修生が海外からやって来ているが、彼らは研修を通してどのような技術を自国に持ち帰るのだろうか。日本の技術の何処に魅力を見出して帰るのだろうか。世界最先端を自負するアメリカ工兵隊の技術を継承するパナマ運河庁技術部長の一言は、大きなヒントになるのではないだろうか。力任せに大量に安く施工するだけの分野ではかなわなくても、日本の伝統的な細やかさを生かした設計施工技術で世界に広く貢献する。こんな所に日本の港湾建設技術の方向性があるのではないだろうか。

世界の港湾建設技術者から敬意を持って日本語の名前で呼ばれる、そんな日本オリジナルの技術がたくさん誕生することを期待してやまない。